

## 《書評》

ユク・ホイ著 伊勢康平訳 ゲンロン

『中国における技術への問い  
——宇宙技芸試論』

(東京大学) 汪 牧耘

## I. 新たな技術哲学を求めて

本書は、これまで西洋中心的に論じられてきた「技術」という概念を中国の事例から捉え直すものである。それを踏まえて、資本主義以外にもありえた「宇宙技芸」のあり方を示し、今日における地球規模の課題を乗り越えるための哲学的な提案を行っている。

著者のユク・ホイ (Yuk Hui, 許煜) は、香港出身の哲学者である。大学時代はコンピュータ・エンジニアリングを専門としていたが、後に欧州で技術哲学研究を始める。現在は香港に拠点を置きつつ、世界各国で活躍している著者は、独自の技術哲学を発展させながら、再帰性と偶然性、芸術論などのテーマに取り組んできた<sup>1)</sup>。本書は、著者の比較的早期の作品であり、その関心の原点と幅を理解する上で良い手がかりとなる。英語で書かれた原書<sup>2)</sup>は2016年の刊行以来、現時点ですでに10近くの言語で訳されており、世界における中国哲学・思想の意義を考察した最前線の研究として注目を集めている。

世界秩序が揺らいでいるなか、西洋中心的な概念・歴史観では説明しきれない「非西洋的なもの」に価値を見出し、さらにナショナリズムやポピュリズムに回収されないようにしながら、それに力を持たせるにはどうすればよいか。地球規模の課題に直面しながら、特定の地域における伝統の「再発明」を試みた本書は、哲学にとどまらず、新しい価値のあり方を追い求める他分野からの関心にも響き合う一冊であると、評者は確信している。

## II. 本書の構成と主な内容

本書の目次は以下のとおりである。

## 序論

- 1 プロメテウスの生成
- 2 宇宙・宇宙論・宇宙技芸
- 3 テクノロジーによる断絶と形而上学的統一
- 4 近代性・近代化・技術性
- 5 何のための「存在論的転回」か？
- 6 方法にかんする諸注意

## 第1部 中国における技術の思想を求めて

- 7 道と宇宙——道徳の原理
- 8 暴力としてのテクネー
- 9 調和と天
- 10 道と器 自由と対する徳
- 11 抵抗としての器道——唐代の古文運動
- 12 初期の宋明理学における気の唯物的理論
- 13 明の宋応星の百科事典における器道
- 14 章学誠と道の歴史的対象化
- 15 アヘン戦争後に起きた器と道の断絶
- 16 器道の関係の崩壊
- 17 ニーダムの問い
- 18 牟宗三の応答
- 19 自然弁証法と形而上学の終わり

## 第2部 テクノロジーへの意識と近代性

- 20 幾何学と時間
- 21 テクノロジーへの意識と近代性
- 22 近代の記憶
- 23 ニヒリズムと近代
- 24 近代の超克
- 25 ポストモダンの想起
- 26 故郷回帰のジレンマ

- 27 人新世における中華未来主義  
28 もうひとつの世界史のために

本書を理解するために、本書の核心的な概念——「技術」と「宇宙技芸」——の定義をみてみよう。本書では、「技術」を、①技術 (technics)、②テクネー (technè)、③テクノロジー (technology) という3つの言葉を使い分けながら表している(33頁)。①技術とは、「あらゆるかたちの制作や実践の一般のカテゴリー」を指しており、比較的広い概念である。それに対して、②テクネーとは、「ポイエーシスあるいはこちらへと一前へと一もたらすこと」という、ギリシア的な技術の概念である。そして、③テクノロジーは、「ヨーロッパの近代におこり、たえず増大しつづける自動化へと発展してゆく」ものを指しており、これは、人間や自然を何らかの目的を達成するための利用対象として費やすことをその本質とするものである。

こうした「技術」の定義の違いから、本書の問題関心を説明することができる。つまり、本来①技術とは、異なる地域や文化から生まれたものであり、多様なあり方がある。それにもかかわらず、今日における「技術」の議論・賛否は、総じて②テクネーの概念とその延長線上にある③テクノロジーがもたらしたことを対象としている。そこで本書は、テクネー／テクノロジーの概念形成に絶大な影響を与えたドイツの哲学者マルティン・ハイデガー(1889-1976)の議論を引きながら、ハイデガーが取り扱ってこなかった非西洋社会の地域的な視点を導入し、「技術への問い」を創りなおすことを試みた。

「宇宙技芸」(cosmo-technics)という概念の発明は、こうした試みの結果である。これは、技術を媒体としながら、宇宙と道徳の関係を調和させようとする概念である(117頁)。この概念を力点として本書は、西洋哲学に基づく宇宙技芸と異なる

可能性を具現化することで、資本主義による諸問題から抜け出すことを企図している。具体的には、中国の「器(チイ)道(ダオ)」の宇宙技芸が提案されている(406頁)。

論評に入る前に、各部の内容を簡単にまとめておきたい。

序論(1-6)では、本書の問題関心、核心概念、取り扱う先行研究の幅、そして方法的工夫を概説している。ハイデガーは1953年に「技術への問い」という有名な講演を行い、テクノロジーが西洋哲学の帰結であることを主張した。こうしたハイデガーの議論が今日でも大きな影響力をもっている。そのため、西洋とは異なる技術哲学を考え、テクノロジーの多様性を構想する必要性が生まれる。それに対して、これまでの学者・思想家は存在論的に異なる技術については考えてこなかった。テクノロジーを論じるにあたり、伝統的な形而上学を参照した例はいくつかあるが(後述)、それぞれに課題がありそれらの克服が必要である。

第1部(7-19)は、中国における宇宙技芸が体系的かつ歴史的に概説されており、これと対応するヨーロッパの概念や論説との比較も行われている。ハイデガーの議論は、古代ギリシャの神話に起源を持つため、技術が自然を代補し「完成」させるという発想(111頁)を持っており、それによって技術と暴力が結びつけられる。しかし、このような立脚点は、中国の歴史には見られない。中国にあった宇宙技芸は、宇宙と道徳の有機的な交流を通じた調和への追求であるからだ。この点は、中国における「器」と「道」の議論から確認できる。

まず、道家思想では、道は器(道具)よりも根源的であると同時に、器との統一を示している。すなわち、器は道に導かれているため、技術的な道具の完成は、生と存在の完成でもある(159頁)。それに対して、儒学における器道関係は、「礼」

に現れている。礼は、「一連の制限であるとともに、物事の秩序を保つための実践でもある」(164頁)。人が内在的な道を知るためには、内省と礼の実践は欠かせない。ここで、道の両義性が浮かび上がる。すなわち、道は自然の名のもとでの技術の完成を表す一方で、たえず道を墮落させる可能性をもつ技術への抵抗の精神としても理解される(167頁)。道家と儒学の思想に見られるこうした解釈の違いは、道の両義性ゆえであろう。他方、宇宙・生活様式への関心に基づく器と道の統一関係は、道家にも儒学にも共通してみられる。

唐代の古文運動や宋明理学における器道関係の再解釈、宋応星による器道の道徳的関係の日常的生産活動への拡大に見られるように、中国の歴史の変遷は常に器道関係の再定義を伴ってきた。しかしアヘン戦争の勃発は、中国にあった器道の統一関係の断絶と、全体論的なものの見方の解体をもたらした。当時の中国は、欧米文化の技術に抵抗することも、正面から向きあうこともできなかった。その結果、一種の「デカルト的」な近代性が中国で生まれた。これは、「中国思想の『根本原理』を保全したまま科学やテクノロジーの発展を遂げようとする試み」である(211頁)。このように、物理世界を思考し支配できると主張してきた結果、中国に存在していた「道」は、西洋の社会・政治・科学の「理論」に、そして「器」は「テクノロジー」に対応する概念として翻訳されることになっている(212頁)。こうした西洋的な技術思想と対決するなかで、いにしへの宇宙技芸の精神が姿を消してゆく。

1949年以降、マルクス主義的なイデオロギーは中華人民共和国のあらゆる側面を支配した。以降、ほとんどの技術哲学の議論は、「マルクス主義的なテクノロジー批判と並行して、西洋の技術哲学(TechnikphilosophieあるいはPhilosophy of Technology)を中国に導入し、取り組むことに終始していた。今日の中国において、テクノロジー

がもたらす理性は、「あらゆる条件によつての条件に、またすべての原理によつての原理になりつつある」(266頁)。

第2部(20~28)は、第1部で述べられた中国における技術の思想と西洋のそれとの対決が、時間の構造という視点から論じられる。そのひとつの目的は、中国、とりわけ環境・社会危機が明らかになった人新世の中国が抱える、テクノロジーに関する問いが潜む暗闇に新たな光を投げかけることだとされている。

その議論は、中国の技術史研究の代表的人物、ジョゼフ・ニーダムへの反論から始まっている。ニーダムは、「なぜ中国では近代的な科学やテクノロジーが生じなかったのか」という問いを打ち出し、社会的要素を挙げると同時に、哲学的な要因として「中国哲学は機械的な思考の形式よりも、有機的な思考の形式にもとづいている」(271頁)と指摘した。他方、中国の技術思想において、「機械的・有機的」という対立は自明ではない。そのため、著者は西洋と中国における、時間と幾何学の違いを検討するという戦略を採った。というのも、西洋と比べて、中国思想は時間と幾何学について詳しく述べてはいないため、中国が西洋と異なる技術発展の条件を示し、さらにアリストテレスが示した「点-線」の時間概念に基づく近代化を乗り越える可能性があるからだ。

しかし、今日の中国は、むしろ空虚な合理性や計算能力の拡大を推し進め、近代の時間軸を築く重要なプレイヤーのひとりにもなっている。つまり、本来あり得た思想の可能性が、テクノロジーのグローバル化に伴う世界規模の近代性に埋もれてしまっているのだ。

こうした近代性の広がりと同じく試みがかつて多く存在していたことはいうまでもない。たとえば、あらたな概念を形成することでハイデガーのテクノロジー論を乗り越えようとすることや、テクネーを自然に従属させて「自然哲学」へ撤退

することなどが挙げられる (319頁)。また、京都学派のように、グローバルなものへの抵抗としてローカルなものに注目する方策もあった。さらには京都学派の終焉から40年後、「近代の超克」という課題はヨーロッパで新しいかたちを取るようになった。リオタールによる「ポストモダン」である (354頁)。リオタールが問いかけているのは、新しいテクノロジーは未知の可能性を開くのか、それともよりいっそう効率的で覇権的な総合、つまり自動化を促進するだけなのか、ということであった。

しかし、これまでの試みは、総じて近代性に囲まれた問いかけであった。これらは近代性に抵抗することに失敗したといえるが、それらを踏まえてニーダムの問いを捉え直すことはできる。すなわち、問うべきは、非西洋社会の「伝統が科学とテクノロジーを生み出せるかどうか」ではない。どうすればこれらの伝統が、「自身のために新しい領域を根本から切り開くべく、グローバルな時間軸を自分たちのものにできるのか、またいかにして二元論へ後退せずにこれを成し遂げられるか」である (372頁)。

百年にわたる近代化を経て21世紀が到来し、方向喪失 (disorientation) が加速している。それは東洋が西洋化によって否定されるようなdisorientationでもある。しかも、ハイデガーが予期したヨーロッパの危機と比べ、アジアにおいては、はるかにすさまじい速度で徹底的な「根こぎ」——自らの技術が、自身の伝統的な宇宙技芸にも、西洋的な宇宙技芸にも支えられていない状態——が生じている。そのなかで、世界各国のあらゆる哲学において、「故郷回帰」の危険性が増大している。だからこそ、グローバル化には対抗しつつ、「故郷」という実体をもった排他的な場所以外の選択肢を追求すべきである。そしてその追求は、「技術の問いを、普遍的な技術論理ではなく、さまざまな宇宙技芸の問いとして切り開くことに

よって、可能となる」(381頁)。

### Ⅲ. 価値創造の罫、戦略とその先

以上のように、本書は宇宙技芸を各地域の伝統から再発明する必要性・可能性を再確認して、論を締め括っている。大まかに挙げるだけでも、西洋哲学、技術史、人類学、京都学派、新儒家、ポストモダンなどが対象となっている。それらを論じる中で湧き上がってきた概念の「発案」(67頁)を批判的に取り入れながら、独自のテクノロジーの問いを描きだしたことは、本書のユニークで興味深い部分である。

特筆すべきは、「非西洋社会」を価値付ける際の果敢かつ慎重な姿勢である。価値の創造・再発明は、前進的・積極的な取り組み・工夫のようなイメージと結ばれやすい。しかし、本書は、価値創造の落とし穴を避けようとする、いってみれば「消極的な作業」に努めた。なかでも、概念の通約不可能性という実質を受け入れる努力は示唆に富む (94頁)。「技術」という幅広いテーマに取り組みにあたって、西洋哲学の用語におおよそ対応する訳語が、中国語の中にも見受けられるようになったのは事実である。それに対して、本書は、異なる言葉・言語体系にあった発想の違いを丁寧にひもとくことで、既存の論調による同質化を回避したといえる。

また、本書は開発の規模拡大と方向喪失の並行という中国の現状を理解する上で有益である。著者は、ハイデガーの技術論の予言を受け継ぎながら、今日のより深刻な現状の思想的混迷を分析した。近代における「中体西用」(端的に言えば目的と手段の二分法)は、器道の統一という中国にあった宇宙技芸を崩壊させただけでなく、技術・文化・宇宙論の断絶、つまり「根こぎ」状態をもたらしている。これは結果的に混沌とした実用主義として跳ね返っており、社会の底辺にいる人々の息苦しさや全体像の見えない環境崩壊とい

う形で皺寄せがきている。人新世の課題を冷静に捉えるには、資本主義への一方的な批判ではなく、資本主義と非資本主義の諸形態がどのように方向喪失の中で互いに絡み合い、あるいは共犯関係を作り上げてきたのかを理解する必要がある。

一方、本書に対する疑問もいくつかある。最大の疑問は、技術の「物質性」という本書の着眼点にある。本書は、技術の物質的側面を取り上げることで、これまで観念論を中心としてきた思想・哲学研究者の議論と一線を画した。しかし、再発明された宇宙技芸が存続できる制度的・物理的条件、言い換えれば資本主義という「この惑星を支配するもっとも有力な宇宙技芸」(393頁)のヒエラルキーを「物質的」に克服する可能性はどこにあるか。開発・援助を研究課題とする評者からみれば、西洋的近代化の代替案は、国際社会が想起・復唱・忘却を繰り返してきたテーマにはかならない。E.F.シューマッハーが打ち出した「中間技術」<sup>(3)</sup>をはじめ、技術の再発明を通じて近代の暴力を洞察したり、それに抵抗したりする実践は少なからずあったが、やがて歴史に埋もれてきた。こうした技術的思想・実践の浮き沈みがある中、本書が提案した「さまざまな宇宙技芸」が、現代社会を覆い尽くしつつある資本主義に横取りされない「哲学的な保証」は、どこにあるのだろうか。

「具体的に何をすればいいのか」を知りたい読者にとって、本書はやや物足りなさを感じさせる。しかし、本書による哲学的試みによって浮かび上がった非西洋的発想は、我々の実践を豊かにする思想的資源となるに違いない。地球規模の危機に向き合い、失った方向感覚を取り戻すには、人文社会自然科学の諸分野の「成果」だけでなく、「盲点」をも共有しあう場が求められている。

(2022年8月, 475頁, 3,300円+税)

[注]

- (1) Yuk, Hui. *Recursivity and Contingency*. London: Rowman and Littlefield, 2019; Yuk, Hui. *Art and Cosmotechnics*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 2021.
- (2) Yuk, Hui. *The Question Concerning Technology in China: An Essay in Cosmotechnics*. Falmouth: Urbanomic, 2016.
- (3) 詳細はE.F.シューマッハー著、小島慶三・酒井懋訳『スモール・イズ・ビューティフル』(講談社学術文庫, 1986年)を参照。